

藤原正彦著「名著講義」文芸春秋社 2009年12月10日刊を読む

「お天道様が見ている」の素晴らしさ

学生 私は最初「武士道」なんて言って騒いでいるのは外国人ばかりで、なんでいまさら読むのかなと思っていました。書いてあることも古いことが多く、現代には当てはまらないことばかりです。でも読んでいくうちに、武士道の教えがここまで失われてしまった日本社会は、危険なのではないかと感じました。

藤原 1 . 本の後半では、新渡戸も武士道の将来を憂えています。おそらく西洋のことだと思いますが、強大なる諸勢力が入ってくることで武士道が消えゆく日も遠くないという予見は、正しかったと言わざるを得ません。ただ、その後に新渡戸が続けたように、武士道が完全に絶滅することはないでしょう。

2 . 実際、いまでも日本の家庭教育には生きているんですよ。この中で、お父さんやお母さんから「そんなことしたら人に笑われる」と言われたことのない人いますか？ いませんね、全員が言われてきた。日本では「そんなことは法律違反だからやめなさい」とは絶対に言いません。笑われるかどうか、つまり自分や家の名誉に関わるかどうかを基準にやってきた。私は、これは素晴らしいと思いますね。武士道教育で最初に子供に教えるのがこの恥を知ること、つまり廉恥心れんちしんです。

3 . 子供が万引きをしない理由は、それが法律違反だからという国々もあります。こういう国の子供達は、誰も見ていなければ捕まらないので平気で万引きする。道徳規範でものを考えているのではなく、法律とか損得で物事を考えているからそうなります。日本でも近年そういう子供が増えてきましたが、それでも「そんなことをしたら親が悲しむ」とか「お天道様が見ている」とかの理由から万引きをしないことが多い。これは美しい形です。

4 . 法律違反だから万引きしないなんて考え方をするのは、要するに損得でしかものを判断できない、もっともつまらない国のどうしようもないガキ達だけです。

学生 日本独自の文化から、廉恥心という言葉が生まれたと思うのですが、最近「破廉恥」という言葉を頻繁に聞くようになりました。コンビニの前に座りこんだり、電車の中で物を食べたり、公共の場で見るに堪えないようなマナーの人が増えていると感じます。私だったら、恥ずかしくて

できません。

藤原 1 . 他人の迷惑にならなければ何をしようと勝手にしょ、ということですね。道徳を押し付けられなかった世代が育つとこうなる。こういった世代の親も道徳を押し付けられていませんから、若者を叱れない。それが現代なんでしょう。

2 . 『武士道』の中にも、お母さんがまだ小さい子供を論ず場面が出てきました。切腹する前に牢屋で出された最後の食事を食べようとする子供に、「切った腹の中から食べ物が出てくるなんて、武士の子供として笑われますよ」と、空腹を我慢させます。こういった「胆力」を武士の子供は小さい頃から叩き込まれていたのに、今はなくなってしまった。

3 . ただ、この「笑われることが恥ずかしい」という日本の価値基準にも、実はいい面と悪い面があります。笑われることばかり気にしていると、人の目を気にして人と変わったことができなくなる。これでは自分ならではの考えを深く掘り進めたりすることができず独創性も育ちません。

4 . 独創性は、学問をやる上で非常に重要な要素です。学問をやるためには、権威に歯向かっていかなければいけない。ノーベル賞受賞者に向かって「ふざけるな、このやろう、お前の説より俺の説の方が上だ」とやるのが独創性ですから、これは非常に傲慢なことです。当然「そんな説を唱えたら、世界中の学者に笑われるよ」と周囲に言われることもあるでしょう。でもそれにめげて大勢につくことばかりしていたら、独創性は生まれなくなります。

5 . 笑われないようにするというのは日常生活では大切ですが、学問や芸術においては、誰に笑われようと陰口を叩かれようと我が道を行ったり権威に歯向かったりすることが、時には大切となります。

P26 ~ 28

真の国際人になるために

学生 私は、新渡戸の教養の深さに驚きました。「武士道」がどういうものなのかを、それに対応する欧米の事例や思想を、ギリシャやローマの故事から、シェイクスピアやニーチェ、ゲヘーゲルまで、次々と引用して説明しています。

藤原 1 . そこに新渡戸の戦略があるのです。こうして海外の人名や事例を出すことで、日本人独自の武士道が、欧米人の基準に照らし合わせても高い道徳的価値を有している、ということを訴え

ている。相手側の論理や文化を用いて自国の立場や正しさを説得するのは、無知からくる独り合点ではない、という印象を与えることとなり非常に有効なやり方です。新渡戸はそれをこの本で実践したんですね。

2．新渡戸にしても、次回読む内村鑑三にしても、当時の彼らの勉強量はものすごかった。1日のうち、18時間くらいぶっ通しで本を読んだりしていたそうです。彼等の抜きん出た人間観や大局観は、この圧倒的な教養によるものと思ってよいでしょう。

P29

[コメント]

読書による思慮深さはどのように身につくのか。私は、基本的な本(古典)をていねいに読むことだと考える。藤原先生は、お茶の水女子大学でそのような講義をなさっておられる。本著はその速記録。本著から大いに学びたい。

- 2009年11月26日 林明夫記 -